２０２４年月5月5日　青戸教会　「勇気を出しなさい」　　高橋克樹牧師
聖書　エジプト記３３章７～１１節、ヨハネ福音書１６章２５～３３節

本日の聖書個所の最後の部分の３３節で、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」と主イエスは言っています。この言葉は、この世の価値観に中にとどまっている限り理解しづらいものだと思います。先週の説教でも申し上げたように、私たちは多かれ少なかれ、その時代の大方の考え方＝時代精神を自分の中に取り込んで自分の生きる価値観を形成しています。

ところが、主イエスは、この世で生きている限り、この世では苦難に出遭う。しかし、勇気を出して生きていきなさい。なぜなら、私は既に世に勝っている、と言うのです。この個所を時代精神の視点から解釈するならば、主イエスは自分の幸不幸の価値基準となっている時代精神に既に優っている、ということを語っているのです。

先週、４月２８日に呼吸不全のために星野富弘さんが７８歳で召されました。この星野さんの詩画集の言葉の中に「いのちが一番大切だと思っていたころ生きるのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った日生きているのが嬉しかった」という言葉があります。この言葉に出会ったのは、私が神学生の時、神学生の説教奉仕で沼津教会に行った際、説教前に牧師室で待機していたとき、その部屋に飾られていたものです。皆さんの中にも、星野富弘さんのファンは多いと思います。私が神学校に進学する前には既にキリスト教界では著名な作家・詩人になっていました。

「いのちが一番大切だと思っていた」と言うのは、私たちがこの世で生きているときに無条件で前提にしていることです。「命あっての物種」ということわざがあるように、何事も命があればこそであって、死んでしまっては元も子もなくなるという考え方です。また、現在の価値観で言えば、自分の力で事態を切り拓いていくという価値観でもあります。このような価値観がただちに悪いと言っているのではありません。しかし、この世の価値観＝その時代精神と同じような価値観を持っている限り、その価値観にそぐわない事態に自分自身が直面したならば、その状況というものは「苦難」以外のなにものでもなくなります。身近な例でいえば、以前に２４時間テレビ「愛は地球を救う」と番組がありました。障碍者を支援する番組ですが、この番組で人々を感動させるものが、障害があっても人並み以上に頑張る姿を見せて、視聴者を感動させるというものでした。例えば、全盲の少女が富士山登山に挑戦するという企画があったりしたのですが、以前から、こういう演出は「感動ポルノ」だという障がい者団体からの批判がありました。障害を見世物にしているという批判です。このような演出を企画する背景には、障害を持っていると、今の社会では十分に活動できないという大前提があります。だけれども、障がい者でもこの世で頑張って生きている人がいるのだ。だから、健常者はこの世で少々の挫折に出遭っても、頑張って生きていくべきだということを無意識のうちに健常者に強いる結果になってしまうというものでした。つまり、障がい者を見世物にすると同時に、健常者にこの世で頑張っていきていけという無言の圧力を与えるものとなっていたのです。

ところが、星野富弘さんの「いのちが一番大切だと思っていたころ生きるのが苦し

かった。いのちより大切なものがあると知った日生きているのが嬉しかった」という言葉にあるように、命がこの世で一番大切だと思っていた時には気づかなかった価値観の転換が主イエスに出遭うことによって生じたというのです。「いのちよりも大切なもの」とは主イエスのことなのです。星野富弘さんが洗礼を受けてクリスチャンになったことで生まれた言葉なのです。そして、この主イエスに出遭うことで、それまでこの世的な苦難を乗り越えることができるようになったという意味でもあるのです。

この世で苦難と感じるものを乗り越えるには、この時代の支配的なものの考え方を乗り越えている必要があります。けれども、それは簡単なことではありません。誰一人として時代精神から自由な人間はいないからです。けれども、私たちキリスト者は時代精神を乗り越えている契機が既に与えられているのです。この世で自分に不都合な出来事を苦難と受け止めてしまう思考は、自分の価値観が時代精神の枠組みの中にあるからです。

例えば、この世の生存競争をやむをえないこととして受け入れていると、おいてけぼりになった人がいても致し方ないことと判断してしまいます。けれども、私たちは主イエスによって、何のいさおしがないにもかかわらず、罪を赦され、受け入れられて生かされているのです。にも拘わらず、他人に対しては冷酷になってしまうところがある。これは、信仰者個人の気質というよりは、その信仰者がいつまでたっても、自分が生きている時代精神の枠組みの中に生きているからです。すでに、私たちは罪赦されて、主イエスに受けれている身であります。しかも、父なる神が、この自分の人生という舞台に御業を働かせていてくださっているのです。神の御業が働いている人生だという受け止め方ができているならば、この世で出会う苦難にも神の何らかの意志が現わされていると考えるのは当然のことです。

このように、自分の力でこの世の荒波を乗り越えていくという考え方だけを唯一無比な者としている限りは、いのちより大切なものがあることには気づくことができません。

先ほども申し上げたように、いのちよりも大切なものとは主イエスであると同時に、私たちキリスト者が苦難や患難の中にあったとしても、必ず、その背後に神の御旨が働いているということを覚えて生きていくということです。

２６節～２７節を読んでみます。「その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。父御自身が、あなたがたを愛しておられるからである。」とあります。主イエスが私たち信仰者にために神に救いをお願いすることはない。すでに、神ご自身が愛を注いでおられるからである、と言っているのです。このように話したのは、主イエスによって私たち信仰者が平安を得るためである。確かに、この世で苦難があるだろう。しかし、勇気を出しなさい。主イエスはこの世の価値観を乗り越えさせる存在として、私たち信仰者の時代精神を打ち破り、いのちよりも大切な存在になっているのである、と３３節は私たちに言っているのです。